

# 医療系短期大学生の新聞閲読アンケートに見る大学生の情報収集の動向

見尾 久美恵

## Trends in Information Gathering of College Students Revealed in the Newspaper Reading Questionnaire Survey to the Paramedical Students

Kumie MIO

キーワード：大学教育，新聞，NIE，情報収集

### 概 要

筆者は、1年次生対象の共通教育科目「文章表現」の平成24年度受講者328名を対象に、講義開始時と講義終了時に新聞閲読に関するアンケート調査を実施した。その結果、「日ごろ新聞を読まない」という学生がいずれも8割を超えた。新聞を読まない理由（複数回答）は、講義の前後いずれでも、「忙しい」「テレビ・インターネットで十分」「新聞をとっていない」「つまらない」「難しい」の順で多かったが、「テレビやインターネットで十分」「つまらない」「難しい」と答えた学生の割合は講義後には減っていた。大学生として今後新聞を読む必要性については、8割を超える学生がいると感じているにもかかわらず、講義終了時の調査でも新聞を実際に読んでいる学生は2%増えたに過ぎず、意識と行動にずれがあることが示された。新聞に対する学生の行動を変え、情報の的確な読み取りと活用ができる学生を育てるために、大学における新聞の活用策を考えていかなければならない。

### 1. 緒 言

小・中・高等学校の新学習指導要領には、指導すべき内容として「新聞」が明確に位置付けられ、多くの教科に盛り込まれた。NIE (Newspaper In Education) は、新聞の特性（一覧性・俯瞰性・解説性・詳報性・記録性・携帯性・保存性など）を活用した「今」を取り入れる教育として重要な位置を占めることとなった<sup>1)</sup>。一方、大学では学生の新聞離れが深刻な状態になっている。新しい学習指導要領のもと、小中高における新聞活用がさまざまに展開し、発展していったとしても、大学にまで及ぶのは教職科目などに限られてくるのではないかと思われる。同時に、大学生の情報収集の在り方が、パソコンやスマートフォンを用いたICT (Information and Communication Technology) の活用へと急速に変化している中で、新聞を習慣的に閲読する学生はますます少なくなっていくのではないかと懸念される。

総務省の『平成25年版 情報通信白書』によると、新聞閲読の1日平均時間は、全体で15.5分、10代で1.7分、20代で2.4分である。平成20年版の同白書において、全体が31.1分、若年層が14.2分であったのに比べると、5年間の変移で全体は半減、10代や20代ではその何倍もの勢いで加速度的に減少している。

大学においても、学生が新聞をどの程度読んでいるのか、あるいはいないのかについての調査がすでにいくつかの大学で進められてきた<sup>2)3)4)5)6)</sup>。そして、学生に新聞の特性について考えさせ、新聞を知る機会を設けることから着手する必要があるということが指摘されている<sup>7)8)</sup>。一方で、大学生は、インターネット、活字、テレビなどさまざまな媒体について、状況に応じて、適切な方法を選択して利用しているという指摘もある<sup>9)</sup>。さまざまなメディアからあふれ出てくる情報を読み解き、社会を生きるセンスと情報を判断する眼力を養う上でも、新聞活用の有用性が指摘されている<sup>10)</sup>。このような調査は、各大学で経年的に行われるべきで、それぞれの大学の実態に応じた取り組みが必要である。新聞の活用は、メディアリテラシー教育にも資するものであり、完成度の高い文章を読むという内容に基づいた有用性や、新聞の内容を通じて得られ

(平成25年10月23日受理)  
川崎医療短期大学 一般教養  
Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

る教養や社会認識の深化という役割と並んで重要なものである。

本稿では、新聞読書のアンケート調査を通して、大学生の新聞に対する意識と行動、また、情報収集の実態を明らかにする。そして、一般常識や文章力、情報収集力など、新聞活用を通して養われる基礎的な力の涵養につながる教育の必要性について提言する。

## 2. 研究方法

### 1) 調査対象

1年次後期開講の共通教育科目である「文章表現」の平成24年度履修者328名(学科は4学科にわたる)をアンケートの対象とした。回答の得られたもののうち、未記入や回答に不備があるものを除き、講義開始時のアンケートでは314名(有効回答率95.7%)、講義終了時のアンケートでは303名(有効回答率92.4%)を分析の対象とした。

### 2) 調査期間

「文章表現」科目は学科別に開講しているため、学科によって調査日は異なるが、平成24年10月の講義開始日と平成25年1月ないし2月の講義最終日にアンケートを実施した。

### 3) 調査方法

調査には、記名自記式質問紙を自作した。調査項目は、新聞読書の有無、新聞読書の頻度、閲読する新聞の種類、閲読の動機もしくは非閲読の理由、インターネットのニュースソースの利用状況などで、それぞれ2～7項目の選択式とした。また、新聞読書の動機に関する質問については、項目を選択した理由を記述する欄を設けた。

### 4) 倫理的配慮

質問紙に、データとして研究等に使用する場合があります。また、名前など、個人的に特定されることについては掲載しないことを記し、提出をもって同意したものとしました。

## 3. 結果および考察

対象となった学生が日ごろ新聞を読んでいるか否かについて尋ねた結果を図1に示した。新聞を読む習慣のある学生は、いずれの学科でも10～20%程度にとどまった。新聞を使用した講義を行った後に同じアンケートを行ったところ、新聞を読む学生の割合は若干増加する傾向にあったが、それでも全体で17.2%から19.8%へのわずかな増加にとどまった。最も大きく変

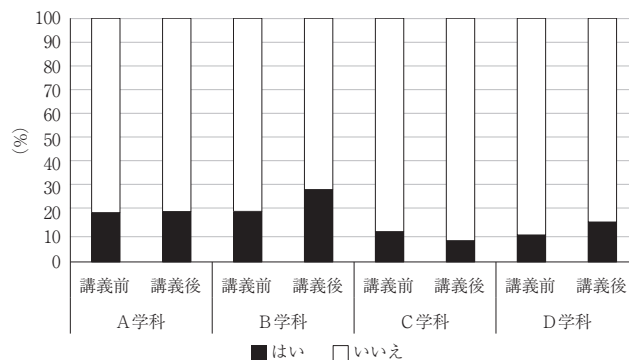


図1 日ごろ新聞を読むか

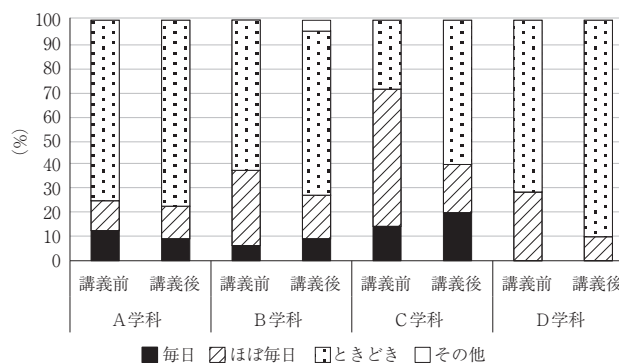


図2 新聞を読む頻度

化したのはB学科の学生であった。B学科の学生は、前期に開講している「日本語」科目を全員が履修していた。「日本語」では新聞を扱う課題を課していたため、効果が上がったものと考えられた。先ごろ、関西大学総合情報学部の谷本奈穂ゼミの有志学生が、大学生の新聞離れをめぐる最新事情をアンケートに基づき報告している<sup>11)</sup>。それによると、新聞を「毎日読む」学生は18%だったのに対し、「読まない」学生は82%にも上っている。いずれの大学でも類似の傾向にあることが示唆されよう。

新聞を読むと答えた学生がどの程度の頻度で新聞を読んでいるかを尋ねた結果を示したものが図2である。A・B・D学科では、最も多かったのは「ときどき読む」という学生であったが、C学科では講義開始時のアンケートでは、「ほぼ毎日読む」と答えた学生が多かった。講義後に新聞を読む頻度は必ずしも増えておらず、C学科とD学科では新聞を読む頻度が減る傾向があった。学生の中には、専門科目や実習科目が忙しくなり、新聞を読む余裕がなくなってきたという者もいたことから、そのようなことも関わっているものと思われた。

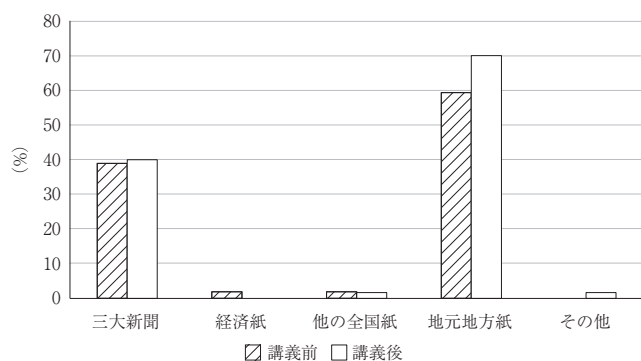


図3 どの新聞を読むか (全学科集計)

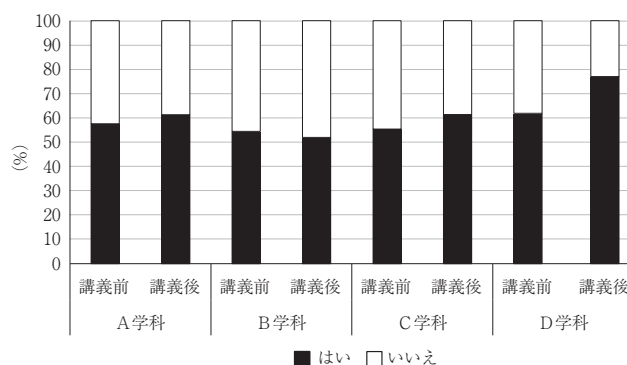


図5 インターネットのニュースや新聞を読むか

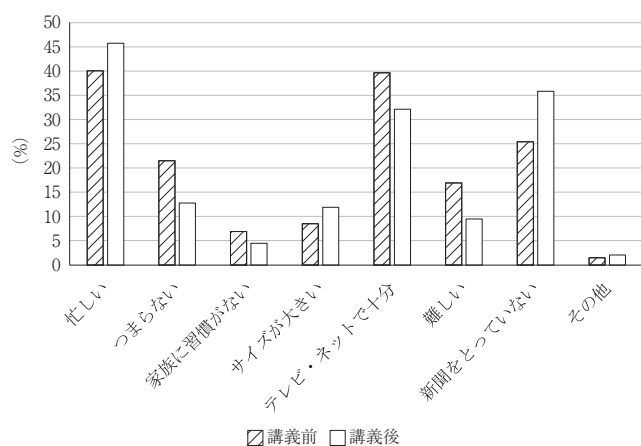


図4 新聞を読まない理由 (全学科集計)

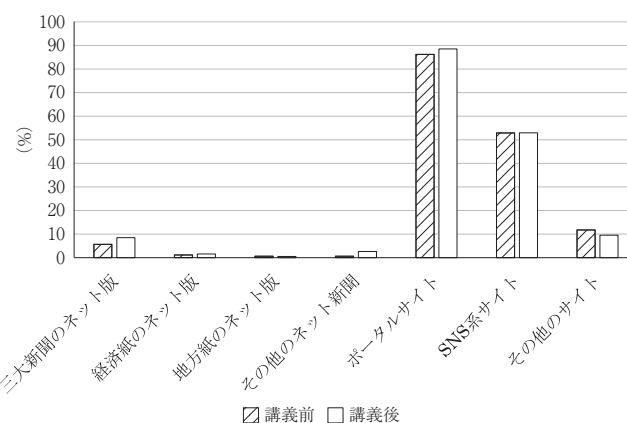


図6 インターネットのニュースや新聞の種類 (全学科集計)

図3は、学生が読む新聞の種類を複数回答で尋ねた結果を示したものである。いずれの学科もほぼ同じ傾向であったため、全学科のデータを集計したものを示した。最もよく読まれているのは地元地方紙であり、続いて朝日・毎日・読売の三大全国紙であった。家庭で購読している新聞の影響が反映されているものと考えられた。講義の前後で比較すると、地元地方紙の割合が伸び、全国紙も若干増えている。これは、講義の課題で新聞記事の切り抜きや書き写しを行ったため、学生が新聞に接する機会が増えたためとも考えられた。

図1に示した質問で、約80%の学生が新聞を読まないことが明らかになったが、新聞を読まない学生に対して、なぜ新聞を読まないのかを複数回答で尋ねた(図4)。講義の前後いずれでも、多くの学生が「忙しい」「テレビ・ネットで十分」「新聞をとっていない」という理由を挙げた。「忙しい」という割合が講義後に増えたのは、専門科目や実習科目の増加によるものの可能性がある。実際、アンケートの自由記述欄に「専門のレポートで忙しい時期になぜ「文章表現」をやらなければならないのですか」と書いた学生もいた。「新聞を

とっていない」と答えた学生の中には、自由記述欄に「下宿のため新聞が買えない」「新聞購読のお金がない」と書いた学生もいた。また、人数は少なかったが、「家族に習慣がない」という学生が5%程度いた。講義後に割合の下がり方が大きかった項目は、「つまらない」「難しい」という回答であった。これが、講義を通じて新聞に対する興味が増したことによるものか否かについては、今回の調査だけでは即断できないが、講義の意義を見出し得る結果となった。

すべての学生に対して、インターネットのニュースや新聞を読むか否かを尋ねたところ、図5に示したように、いずれの学科でも過半数の学生が「はい」と答えた。このことは、インターネットの新聞やニュースサイトが学生にとって重要なニュースソースとなっている可能性を示唆している。A・B・C学科では講義の前後で差はなかったが、D学科では講義後に「はい」と答えた学生の割合が増加していた。

インターネットのニュースや新聞を読むと答えた学生に対して、彼らの閲覧するインターネットのニュースや新聞の種類について複数回答で尋ねた結果が図6

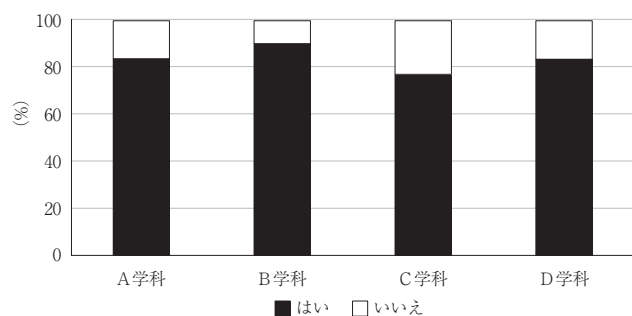


図7 これから先新聞を読む必要があると思うか

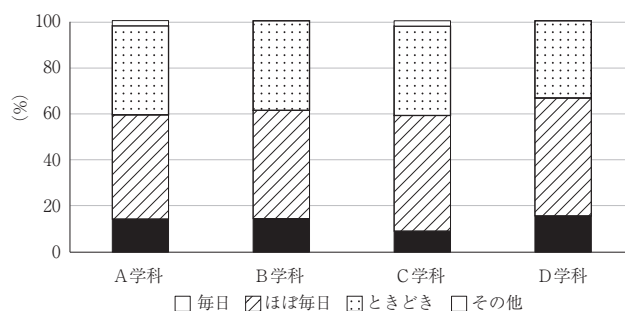


図9 これから新聞を読む頻度

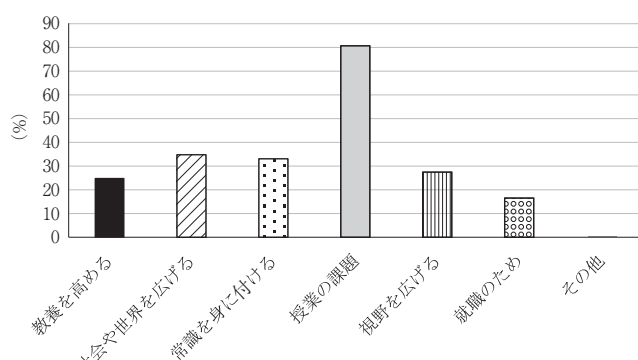


図8 何の目的で新聞を読んだか (全学科集計)

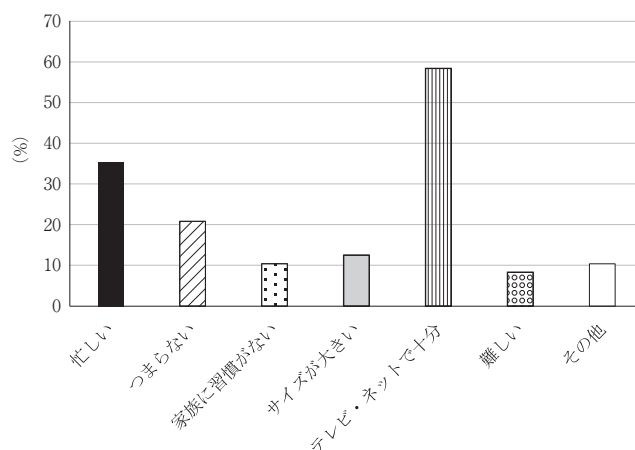


図10 これから新聞を読まない理由 (全学科集計)

である。いずれの学科でも同様の傾向であったため、全学科集計した結果を示した。図から明らかなように、学生の回答に講義の前後でほとんど差がなかった。85%以上の学生が yahoo や msn, Google news などのポータルサイトのニュース記事を閲覧していた。また、約半数の学生は、mix, facebook, twitter などの SNS (social networking service) 系サイトのニュース記事を利用して。最近では、全国紙や地方新聞もインターネットサイトを作成してニュースを配信しているが、それらを利用している学生は0.5~8.5%と、わずかな割合にとどまった。

ここまでで、調査対象となった学生のうち新聞を読んでいる学生の割合は決して多くはないことが明らかになったが、他大学と大きな差はないように思われた。講義後に、これから先新聞を読む必要があるかという質問をすると、図7に示したように、いずれの学科でもほぼ8割以上の学生が「はい」と答えた。このことから、調査の対象となった学生は、新聞を読む必要性について、一定の自覚はあるものと推察された。

新聞を読むことの必要性を尋ねた図7の質問と関連して、新聞を読む目的について、講義後に複数回答で尋ねた結果が図8である。各学科とも同様の傾向であ

ったため、全学科集計した結果を示した。新聞を読むことが課題であったためか、「授業の課題」という回答が約8割に上った。「教養を高める」「社会や世界を広げる」「常識を身に付ける」「視野を広げる」という回答もそれぞれ約25~35%、「就職のため」という回答が16.5%であった。

図7の「これから先新聞を読む必要があると思うか」という質問に対して「はい」と回答した学生に対して、どれぐらいの頻度で新聞を読むかを尋ねたところ、いずれの学科でも約6割の学生が「毎日」もしくは「ほぼ毎日」と答え、約4割の学生は「ときどき」という回答であった(図9)。

ただ、新聞を読む必要性を自覚している学生が図7で示したように約8割に上り、新聞を読むことに対して図8で示したような目的意識も持ち、図9で示したようにきちんと新聞を読もうとする気持ちはあっても、現実には新聞を読む習慣のない学生が多い。今後、このギャップを埋めるための工夫が必要であると思われた。

図7の「これから先新聞を読む必要があると思うか」という質問に「いいえ」と回答した学生に対して、複



表1 大学生としての新聞活用（自由記述欄より全学科集計）

前向きな意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会人としての一般常識を知っておくべき。</li> <li>・教養や知識を身に付け、どんな人とも話せるようになるために必要。</li> <li>・知識・教養を身に付けられる。</li> <li>・自己啓発のため。</li> <li>・大学生も社会人の一員である。</li> <li>・社会に出る準備ができる。</li> <li>・社会情勢・国際情勢を知るべき。それらについて考える必要がある。</li> <li>・知識がないと社会に出たとき恥ずかしい。</li> <li>・経済・医療のニュース（最先端医療、医療現場での新たな取り組み）など将来必要。</li> <li>・地域のことがわかる。</li> <li>・自分の興味があること以外にも目を通す機会になる。</li> <li>・就職に役に立つ。</li> <li>・就職するにあたって、専門のことだけを知っていてもだめだと思う。</li> <li>・編入学や就職のときに言葉や文章の表現に役立つ。</li> <li>・就活・進学のため。面接で役に立つ。</li> <li>・活字慣れをし、情報に対して自分の考えを持つ訓練にもなる。</li> <li>・活字を読むことが必要。</li> <li>・活字で読むことが大切。</li> <li>・活字を読む習慣を身に付けるため。</li> <li>・きちんとした文章を読む機会になる。</li> <li>・テレビを見るだけでなく、文章を読むことが大切。</li> <li>・読解力。</li> <li>・何度も見返すことができ、理解を深めることができる。</li> <li>・興味のあるニュースを時間の余裕のあるときに読める。</li> <li>・携帯のニュースではあまり扱われないニュースもわかる。</li> <li>・テレビのニュースより内容が濃い。</li> <li>・携帯やパソコンから情報を得ることができるが、誤った情報も含まれていることがある。正しい情報を入手したい。</li> </ul>
否定的な意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テレビ・インターネットで十分。簡単で早い。</li> <li>・テレビや携帯のニュースを見ていれば社会のことがわかる。</li> <li>・テレビのほうがわかりやすい。</li> <li>・新聞以外でも情報がすぐに入る。</li> <li>・携帯はいつでもどこでも見られるので便利でリアルタイムでわかる。</li> <li>・忙しいから、携帯だと移動しながらでも情報を入手できる。</li> <li>・忙しい。</li> <li>・時間がない。</li> <li>・課題やレポートで忙しいのに新聞を読む必要はない。</li> <li>・勉強が忙しいため、課題として新聞に触れる機会がなければ見ないのが現状。</li> <li>・眼が疲れる。</li> <li>・読まなくても暮らしていける。</li> <li>・読まなくても困ったことがない。</li> </ul>

数回答でこれから新聞を読まない理由について尋ねた。いずれの学科もほぼ同じ傾向を示したため、全学科を集計したものを図10に示した。6割近くの学生が「テレビ・ネットで十分」と回答した。「忙しい」と答えた学生が35.4%、「つまらない」と答えた学生が20.8%いた。約1割の学生は「家族に習慣がない」と答えた。この結果を図4と比較すると、現在新聞を読んでいる学生は、「忙しい」という理由が最も多かった

表2 新聞に対する期待

現状について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・真実</li> <li>・正確さ</li> <li>・多様さ</li> <li>・情報量</li> <li>・情報の鮮度</li> <li>・公平さ</li> <li>・インターネットにない地元の記事</li> <li>・詳しさ</li> <li>・目を引く見出し</li> </ul>
将来に向けて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コンパクト化</li> <li>・明るいニュースを増やす</li> <li>・読みやすさ</li> <li>・わかりやすさ</li> <li>・難しい用語の解説</li> <li>・面白さ</li> <li>・ユニークさ</li> </ul>

が、これからも読まないと思っている学生では、「テレビ・ネットで十分」と答えた学生の割合が他の理由よりも多かった。このことは、後述する新聞活用に関する自由記述欄の否定的な回答とも関連があるものと思われた。

表1は、大学生として新聞活用の在り方をどのように考えるかについて、自由記述で回答させたものの中から、代表的な意見を分類してまとめたものである。前向きな意見には、社会人としての一般常識や知識・教養を身に付けようとするもの、経済や医療、地域のニュースへの期待、就職・進学に役に立つとするもの、活字を読む訓練になるとするもの、文章を読み読解力を増すことへの期待などがあった。また、携帯やパソコンからの情報には誤った情報が含まれていることから、新聞に正しい情報を求める意見もあった。一方、否定的な意見としては、テレビ・インターネットのほうが早くて十分であるとするもの、忙しくて時間がないからというもの、新聞を読まなくても困らないからというものがあった。

表2は、図7で「はい」と答えた学生に対して新聞に期待することを記述させたものである。新聞の現状への期待と思われる回答と、将来こうあって欲しいという期待と思われる回答があった。現状への期待としては、「真実」「正確さ」「多様さ」「情報量」「情報の鮮度」「公平さ」「インターネットにない地元の記事」「詳しさ」「目を引く見出し」といった新聞を読む動機付けとなりそうな言葉が並んだ。一方、将来に向けた期待としては、「コンパクト化」「明るいニュースを増やす」「読みやすさ」「わかりやすさ」「難しい用語の解説」「面白さ」「ユニークさ」という言葉が並び、大きな紙

面に難しい記事や硬い内容の記事が並んでいるという印象を学生が持っていることを推察させた。

ニュースを配信するメディアは、新聞・雑誌といった活字メディアとテレビ・ラジオといった電波によるメディアが主体であった時代から、インターネットの発達により、メディアが多様化する時代になってきた。インターネットはスマートフォンや携帯電話を用いることで、場所や時間の制約にとらわれずに様々な情報を得る手段となってきた。今回の調査からも、他大学の調査結果と同様に、調査対象となった学生たちの多くがポータルサイトやSNSをニュースソースとして利用している実態がうかがえる。このような時代にあっては、単にニュースを知るだけであれば、テレビやネットで十分と答える学生が少なからずいることも不思議ではないのかもしれない。また、ポータルサイトやSNSで配信されるニュースの多くは、配信元が新聞社や放送局であり、メディアの多様化がメディアの区別をつきにくくしていることも事実である。今後、テレビやインターネットでは伝えきれない新聞ならではの切り口や掘り下げ方で書かれた記事があることも、学生に伝えていく必要があるものと思われる。

#### 4. 結 語

「文章表現」科目では、2010年度から新聞を取り入れた講義を計画的に行ってきた<sup>12)</sup>。しかし、単に新聞を講義に取り入れるだけでは、若者をめぐるICT環境の激変ぶりに追いついていないことが、今回の調査でも明らかになった。毎年、初回の講義において、学生一人ひとりに一部ずつ新聞を配布し、新聞の面建て、見出しの読み方、記事の構成、新聞の有用性などについて教示してきた。課題として、新聞のコラムの書き写しや記事の要約、言葉の意味調べ、コラムや記事に対するコメントを課してきた。教員から与えられたものでなく、学生自らが新聞を手にとってコラムや記事を選択し、内容について意見を述べるという点では、新聞への主体的な関わりができていけると言える。しかしながら、学生にとっての新聞は「文章表現」という科目の教材であり、課題として指定されたコラムや記事を部分的に抽出しているにすぎないのであろう。それが、「日ごろ新聞を読まない」学生が8割を超えるという辛辣な結果として現れたのである。少数ではあるものの、新聞の課題が苦痛でしかなかったという声も出ている。

新聞などの活字を通して情報の適切なインプットが

行えていなければ、自身をすり減らすだけで、アウトプットの作業もやがては困難になるであろう。社会を知ること、情報化社会を生き抜く力を養うことも、また、それらを通して自身を深め人間的に成長することも望めなくなる。医療系の学生の場合、事態は一層深刻なものとなるであろう。患者や利用者、また子どもと適切に対応し、医療や福祉、また保育の場で活躍できる有能な専門技術者を育成するためにも、コミュニケーション能力や問題解決能力を涵養していかなければならない。そのような力を涵養する手段として新聞閲読は必須である。大学で重視されている初年次教育を効果的に行うためにも、それを担う立場である基礎教育科目は、学生を社会に送り出すという長期的な展望を持って取り組まなければならないことが喫緊の課題であると言える。

今回の調査を通して明らかになった課題を克服するため、「文章表現」の科目における新聞活用では、学生が新聞を日常的に手に取るようになること、新聞を通して社会に目を向けるようになること、新聞の文章から語彙力・読解力・要約力・表現力といった文章能力を養うことを目標としたい。そのためには、教員が用意した記事を通じた指導や新聞記事を要約したものを提出させるような通り一遍の指導では不十分であろう。学生が能動的に新聞閲読に取り組むよう、毎回の授業の中で、学生がスクラップしてきた記事やタイムリーなニュースをピックアップし、就職や進学に結びつけて説明を加えるなど、アクティブ・ラーニングの手法を用いてこれまで以上に新聞閲読の意義を学生に示す必要がある。

さらには、単に一科目だけの課題として新聞に取り組むのではなく、社会常識を涵養する科目やメディアリテラシー教育に関わる科目、専門の導入科目などと連携した、より広い取り組みが今後は必要となるのかもしれない。

#### 5. 謝 辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただいた学生の皆様に深謝申し上げる。

#### 6. 文 献

- 1) 赤池 幹：新学習指導要領とNIE、NIE教育に新聞を、財団法人日本新聞教育文化団、<http://nie.jp/study/>（参照2013年7月26日）

- 2) 片桐雅義：大学生の新聞に対する態度 — 宇都宮大学生を対象として —, 宇都宮大学国際学部研究論集22：181—186, 2006.
- 3) 園屋高志：大学生に対する情報教育の実践～新聞の特性を考察させる授業について～, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要15：197—203, 2005.
- 4) 室井みや・石井恒生：大学生におけるインターネット, 活字, テレビを利用した情報収集方略についての検討, 日本教育工学会論文誌29：213—216, 2005.
- 5) 的地 修：新聞の役割 大学のNIE (Newspaper In Education) を考える, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要5：77—83, 2008.
- 6) 樋口克次：大学における新聞利用の広がりを求めて — 大学におけるNIE実践の提案 —, 日本NIE学会誌6：89—92, 2011.
- 7) 3) に同じ.
- 8) 樋口克次：新聞に望むもの, 日本NIE学会誌6：121—122, 9) 4) に同じ.
- 10) 5) に同じ.
- 11) 大学生の「新聞離れ」事情 不便, かつこ悪い…スマホやSNSで十分, フジサンケイビジネスアイ, 平成25年7月23日(火)16時32分配信, <http://www.sankeibiz.jp/express/news/130723/excl307231630000-n4.htm> (参照2013年7月30日)
- 12) 橋本美香・見尾久美恵：初年次教育におけるNIEの導入 — 「文章表現」での取り組み —, 日本NIE学会誌7：103—110, 2012.

